長洲町立長洲小学校　校長便り　№２４

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和４年７月１１日(月)

独り言

７年前、義父が亡くなった。義父は人が喜ぶ姿を見るのが好きで、人が喜ぶために何をしようかと考える人だった。しかし、それが原因で失敗して周りから叱られる？ということもあったようだ。そんな義父の楽しみが「メダカを飼う」ことだった。

葬儀の日、私の双子の息子達が、「じっじのメダカは俺たちが育てる。」と言い出した。義母は快諾し、２つの水槽を車で運ぶことになった。

車内で水がこぼれぬ様に水を減らし、息子達がビニールで周りを覆いながら運んだ。途中、眠い目をこすりながら、メダカの様子を見ながら我が家に到着。汲み置きしていた水を水槽に加え、１週間ほど様子を見ることになった。

新しい水槽に数匹のメダカを、１２０Ｌのタライに３０匹ほど放ち、飼うことにした。必然として息子達と本やインターネットで飼い方を勉強することになった。

ある日、卵をもっているメダカを息子が見つけ、どうすればいいかを学習し、「シュロの繊維」が産卵床になるとの情報を得た。早速試すと、数日も経たないうちに、シュロの繊維に卵を産み付けているのを発見！　それを見て家族で大騒ぎ。それを別の水槽に移し、１０日…。今度はその水槽の中に、孵化直後の２㎜ほどのメダカを発見。またまた、家族で大騒ぎ。

メダカの変化に一喜一憂する家族の姿を見ていると、義父の残したメダカは、私たち家族に「お金で買えない何か」を残してくれたような気がする。こんな「日常」は「当たり前」のようで、実は「有り難い」ことなのだ。ゲーム、スマホ、ネット…、そんな世界にはお金では買えない物が、私には見える。

今では数が爆発的に増え、大きなタライが３つ並んでいる。数としては４００匹ほどだろうか。義父から頂いたメダカは寿命を迎えた。死ぬ度に「ありがとう」と声をかけ、庭に埋めた。義父が天国で飼うことだろう。後に生まれてきたメダカはスイレンの花の咲くタライをスイスイ泳ぎ、私たち夫婦が世話をしているが、家族全員、毎日、タライを覗いている。

【雑感】子供達の学びに寄せて

保護者の皆様、文部科学省が提唱する「確かな学力」の要素ってご存知ですか？　私は担任時代授業を行う際に常に心がけていたこと３点です。（実際にはなかなかうまくいかないのですが…）第１に「基礎的な知識技能の習得」、第２に「基礎的な知識技能を活用して自ら思考し判断し表現する力」、第３に「学習に対する主体性」となっています。

最初の授業時に１５分ほど、授業に参加するための自覚やオリエンテーションをしていたのですが、その時に重点的に話すのが３点目の「学習に対する主体性」でした。学校に何をしに来るのか？という問いに対し、子供達の返答はほぼ１００％「勉強！」と答えます。しかし、これまでの子供達が言う勉強は「学ばされている勉強」であって、強い学習意欲に裏付けられた「学び」とはなっていなかったようです。学習効果は、授業を行う教師の情熱、実践的な指導力と教材の本質を知ること、そして子供達一人一人が、積極的に学ぼうとする意識が重要なのです。それらがリンクしたところで、教育活動は相乗効果を生みだすことになるのです。

私が目指す新しい学びの理想は、子供達が学び合う中で充実感や達成感を味わわせるものです。学び合いを経験することによって充実感や達成感を味わう子が増え、積極的な学びの集団へと変わっていくのです。長洲小学校の職員集団にはその力が備わっています。

シリーズ「自分を語る」＃２４

四国ツーリングから帰ってきてからは、少しずつ卒業を意識するようになりました。バイクで走りに行くのも、教員採用試験が終わるまでは近場ばかりでした。よく走りに行ったのは、「三瀬峠」です。佐賀市と福岡県早良区を結ぶ道路です。あまりスピードを出す方ではなかったのですが、バリバリ伝説の影響でしょうか、主人公の巨摩郡（こまぐん）に成りきって、峠を攻めて？（そのつもり）いました。近くには北山ダムもあって、春はのんびりした雰囲気でとても気持ちが良かったです。

７月、採用試験です。教育学部に行ったのだから合格するやろう？位の甘い考えで受験しましたので、当然結果は不合格でした。不合格のショックから、それからの半年、何をするでもなく時間を過ごしましたね。仲間が採用試験に合格して、新生活の準備や卒業論文も着々と進めていく中、私は卒業論文も共同で書いていましたので任せっきりになり、相方は愛想を尽かしていました。しかも、少林寺拳法の佐賀県大会に出場し、仲間に無理を強いたため、ゼミ室に不穏な空気が漂い始めました。とうとう、ゼミ室全員から呼び出され「ダメだし」されました。情けなかったですね、あの時は。

この事件をきっかけに採用試験の不合格のショックからやっと抜け出たような気がします。立ち直るというのではなく、抜け出ると言った方が合っています。少しばかり、真面目に勉強し始めましたね。１０月頃のことです。卒業論文の仕上げと採用試験の勉強を並行して始めた時期です。この時期、ぼんやりと自分の下した判断に疑問を持ち始め、後悔に似た感覚を覚えるようになります。「自分は嫌なことを避け、楽な方に進んだんだ。だからこうなったんだ。」いわゆる、コンプレックスです。今では、これをバネに頑張ろうという気持ちになっていますが、当時は自分の大変な卑屈さに、嫌気がしていました。

何とか卒業できた私は、自分の情けなさに押し潰されそうでしたが、好き放題させて貰った上、就職もできなかった自分を、両親に対して詫びました。「４年間ありがとうございました。そして、期待に添えず、申し訳ありませんでした。」と。そして、アルバイトを考えつつ、取り敢えず臨時採用の申込書を熊本市教育委員会に提出し、連絡を待つことになりました。

この経験をこれまで接した子供達によく話していました。楽な方に楽な方にと流されることは、必ず後悔に繋がります。私は高校を卒業する頃から、苦しいことを避け、楽な方へと流されました。その結果、私の心の中には本当に向き合わなければならない事から、解っているのに目を背ける気持ちが芽生え、それを意識しないようにしないようにという、自分の本心を伏せるような、妙な生活をしていました。それが教職の節目で足踏みをすることに繋がったような気がします。この時のことがバネになって今頑張ることができていると感じていますが、経験者としては、若者には早く気が付いて欲しいと思うこの頃です。団らんの中で話題にしてみては如何でしょうか。

（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）